

<英語>

実践的コミュニケーション能力を伸ばす指導と評価の工夫 — 「オーラル・コミュニケーションA」における内発的動機を高める授業を通して —

県立沖縄工業高等学校教諭 新垣 あゆみ

I テーマ設定の理由

平成 11 年 3 月告示の新学習指導要領外国語の改訂の特徴として「実践的コミュニケーション能力」があげられている。文部省教科書調査官の小泉仁は、「元来、実践的でないコミュニケーションはありえないにもかかわらず、あえて『実践的』と冠したのは、外国語の“力”を、実践するための能力として認識し、実践しながら習得するものとして位置づけようというメッセージとして読み取りたい。」と述べ、文型・文法事項や定型表現等の知識としてだけではなく、「言語の使用場面と働き」を意識した実践的なコミュニケーション能力の育成を目指すべきとしている。

そこで、「相手の意向を理解」という実践的目標を掲げているオーラル・コミュニケーションAの授業を通して「実践的コミュニケーション能力」を伸ばす指導に迫ってみたい。

平成 6 年より新科目導入ということで、それぞれの現場では、オーラル・コミュニケーションAの授業研究が進められてきた。前任校においても、担当教諭で新たな試みを取り入れ、授業改善を目指した。授業形態・内容・場面設定や評価等において、コミュニケーション活動を重視するよう工夫を凝らした。それにより、生徒により多く、かつより気楽に発話させるのに、ある程度の効果を上げることができたように思われる。しかし、コミュニケーション活動を重視していても、内容がコミュニケーション活動であったかどうかは、疑問が残る。又、「自分の考えなどを表現したりする」ような自立的、自主的な態度を養うことはできなかった。つまり、実践的コミュニケーション能力の育成には至っていなかったと考える。

コミュニケーション能力育成に重点を置いている言語教授理論では、授業をコミュニケーションに展開する方法を示唆している。授業をコミュニケーションに行うことにより、生徒の興味・関心を喚起し、生徒の活動を活性化し、自主的な態度を培うことができると考えられる。

又、大下邦幸（1996）は、「ブラウンは、内発的動機を高めるには、学習者の自立性や自主性に訴えなければならないと述べているが、コミュニケーション

ン能力を高める指導においても、内発的動機付けは注目されなければならない。コミュニケーションとは本来自立的なものであり、その自立性は学習者の自己報酬的な動機、すなわち自己実現、知的好奇心というような内発的動機によって生まれるからである。」と述べ、内発的動機付けに着目している。

従って、コミュニケーション授業内容を用い、生徒の自立性、自主性に訴え、内発的動機を高める工夫を凝らした授業展開をすることにより、自ら会話しようとする積極的な態度が養われ、実践的コミュニケーション能力を伸ばすことができる。その際、実践的な観点にもとづき意志伝達能力の評価を工夫することによって、生徒の内発的動機を高める手だてとなりえるのではないかと考える。

そこで、次の仮説を立て、本テーマの研究を進めたい。

<研究仮説>

コミュニケーション授業展開のもとで、生徒の自立性、自主性に訴え、内発的動機を高める指導及び評価を工夫することにより、実践的コミュニケーション能力を伸ばすことができるであろう。

II 研究内容

1 実践的コミュニケーション能力と内発的動機について

(1) 実践的コミュニケーション能力について

新学習指導要領外国語の目標は、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。」となっており、それに基づくと、「実践的コミュニケーション能力」は「情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする」能力とすることができる。学習内容をコミュニケーションにすることにより、メッセージの受伝達に主点が置かれ、「情報や相手の意向」や「自分の考え」を伝え合うという「実践的コミュニケーション能力」を育成できると考える。そこで、自ら話すという積極的な態度が必要となってくる。

(2) 実践的コミュニケーション能力を伸ばす内発的動機

実践的コミュニケーション能力を高める授業で、内発的動機は重要である。生徒が積極的にコミュニケーションしなければ、コミュニケーション能力を身につけることができないからである。

鹿毛(1998)は、「内発的動機とは、『もっと知りたい、もっと認識を深めたい、もっと上達したい』という学習意欲のことで、ある学習目的が自己目的的に生じるという心理現象を指す。内発的動機づけによる学習には、他から指示されて学ぶのではなく、自ら進んで学ぶという自律性と、学習を深め、技能を高めていくという熟達志向性という特徴がみられる。よって、学習の到達点は固定されず、目指すものが学習の過程でより価値の高いものへと変わっていく。また、結果よりも学習のプロセスが重要な意味を持ち、それに価値が置かれることにもなる。」と述べている。

その学習意欲を喚起する内発的動機と、実践的側面を強調するコミュニケーションな授業内容とを結びつけた授業展開の工夫について述べてみたい。

2 内発的動機を高めるコミュニケーションな授業の工夫

(1) 内発的動機を高める指導

① 内発的動機を高める指導の留意点

外国語学習における内発的動機に着目している大下は、学習者中心の観点に基づく指導の留意点として、以下のことをあげている。

- ア 学習者の目標達成を促す。
- イ 学習者の当事者意識を呼び覚ます。
- ウ 学習者の意気込みを刺激する。
- エ 学習者の興味、関心、問題意識を刺激する。
- オ 学習者の知的好奇心を刺激する。
- カ 学習者に成就感を感じさせる。

② Autonomous Learning (自律学習)

Autonomous Learning とは、学習課程において学習者自身が学ぶ内容や方法を選択、決定するという self-directed learning (自己管理学習) のことである。Dickinson(1995)は Autonomous Learning と内発的動機の関係について次のように述べている。生徒に学習の決定権を与えることにより、学習環境を教師によって管理されたもの(controlling)ではなく、有益な知識情報をえるための場(informational)として捉えることができる。又、学習の成果や失敗を自分自身が責任を負うものとして捉えることができるようになり、失敗(間違い)しても粘り強く学

習を継続させることができる。さらに、そのことが次の学習への動機づけとなる。その生徒の内面から生じる動機は内発的動機そのものである。Autonomous Learning を確立することにより、内発的動機が高められ、学習効果があがるとしている。

以上の観点から、内発的動機を高める指導として、生徒の Autonomous Learning を確立し、学習者中心に学習内容と学習形態を工夫していく必要があると考える。

(2) 内発的動機を高める学習内容と学習形態の工夫

① 学習内容の工夫

学習内容も生徒の内発的動機を高める工夫を凝らすことにより、主体的取り組みを促すことができる。

ア 生徒の問題意識を揺さぶる。

イ 生徒の発想を活かす。

ウ 自己選択の余地を与える。

Learner Centered Approach (学習者中心のアプローチ)や Autonomous Learning でも謳われているように、生徒に選択権を与えることにより、効果的に意欲付けができ、生徒の積極的な活動への参加を促すことができる。しかし、学習内容すべての選択を生徒に委ねるのは、困難なことである。生徒それぞれのニーズは異なるはずであり、一斉授業として成立させるのは不可能である。そこで、各レッスンのテーマを提示し、その内容に沿って、徐々に選択の幅を広げていくような課題の設定が重要であると考えられる。

表1 自己選択を取り入れた課題：道案内(実際の地図を使用しての練習)

ペアを作って、国際通りの地図を参考に、道案内の練習をしよう。

1 Choose place ① and place ② on the map, and write the place names. ①(国映館) ②(パレットくもじ)

2 Fill in the blanks to direct from ① to ②.

3 Practice in pairs.

A: Excuse me?

B: Yes?

A: How can I get to ② Pallet Kumoji ?

B: Well, { ① go straight on this road for 5 blocks
b. turn right at _____
c. turn left at _____
d. _____ }

and across the crosswalk to the right. You'll find it.

A: Thank you, very much.

エ リーズニング・ギャップを活用する。

リーズニング・ギャップとは、問題を解決する際の「分析・考察・推論・判断」という思考過程が人によって様々であるということに注目したものである。従来のインフォメーション・ギャップ活動に比べると、学習者個人の考え方が反映され、幅の広い活動になる。Autonomous Learning と同様に、学

習者個人に焦点をあてている点に置いて、内発的動機を高めるのに有効であると考えます。

個々でリーズニング（理由付け）の練習を終えた後に、グループ間で、リーズニング・ギャップ（自分の考えに対して相手の意見を聞く）の活動を段階的に取り入れた指導が効果的であると考えます。

表2-1 リーズニングの課題例

Step1 理由付けの練習
Lesson 3 では学校生活について学習しました。あなたの学校生活について思っていることを書きなさい。

I think { my school
my class
my friend ()
English
() teacher } is { great
strict
wonderful
fun
kind }
because _____

表2-2 リーズニング・ギャップの課題例

Step 2 自分の考えに対して、相手の意見を聞く活動 *ペア・グループの設定を事前に行う。

1 ディズニーワールドの地図を参考に、会話を完成させ、ルートを決めましょう。
Situation: ツアーで、"Magic Kingdom Park"に友達と遊びに来ている。
2時間後には、集合場所のメインゲートに行かなくてはならない。
友達との相談で、あと2カ所アトラクションを回って戻ることになった。

S1: What do you want to see?
S2: I want to try ① _____ because I want some (thrill / romantic mood / excitement / adventure / speed / horror:).
S3: I want to try ② _____ because I want some (thrill / romantic mood / excitement / adventure / speed / horror:).
S1: Let's go to both places, but I need to stop by at a (ATM / gift shop / telephone booth / toilet / drink stand) because I _____
S2: Now, let's decide the route.

<Route>
_____ is there.
_____ is there.
_____ is there.
Then we'll be back at the gate.
What do you think of our idea?

2 グループ内で dialogue のパート分担を行い、練習しましょう。
3 ペア・グループで意見の交換をします。
(1) グループAが dialogue を発表する。それを聞きながら、グループBは、地図にルートを書き込む。
(2) 発表が終了したら、自分たちのアイデアをどう思うのか、相手のグループの意見を聞く。
Group ()'s Comment
They think our plan is (great / wonderful / exciting / bad / dangerous), because _____
(3) グループAが終わったら、役割を交換して、グループBの発表を行う。
4 すべての活動が終了したら、Self-evaluation を書く。
(1) How was your English?
Voice volume (声の大きさ) good · average · poor
Pronunciation (発音) good · average · poor
Fluency (スムーズさ) good · average · poor
Comprehension (理解度) good · average · poor
(2) Did they understand your English? Yes / No
(3) What do you need to improve your English? Why?

② インタクションを促す学習形態の工夫

インタクションは双方向のコミュニケーション (Two-way communication) である点で、意志伝達の基本的な形態である。生徒が情報を受けると同時に、自ら情報を発する機会を与えられると言う意味で、効率のよい言語使用が経験できる。教師・ALTと生徒、生徒同士のインタクションをいかに活性化するかということが、内発的動機を高める上で、重要な鍵となる。

ア 生徒間のインタクション「グループ間交流」

グループ・ワークは、仲間同士で課題に取り組むということで、リラックスした気楽な雰囲気作りができる利点がある。又、グループのメンバーそれぞれに役割分担をし、1つの活動に全員が参加できる課題を工夫することにより、環境（この場合はグループ）とかかわっているという実感を味わうことが

できる。この感覚は、効力感 (feeling of efficacy) といわれ、この効力感が満たされることにより、学習意欲が発達するといわれている (鹿毛)。しかし、スキットやディスカッション等、グループで取り組むことができる課題は、発表の際、一方通行の発話になりがちである。又、発表者の英語力が不十分な場合、聞く方の集中力が低下することもある。ここで着目したいのが、「グループ間交流」である。特に、1クラスの生徒数が多い場合は、オーラル・コミュニケーションの授業で、個々の生徒の発話を十分に確保するのは困難である。そこで、グループ間での交流を行うことにより、生徒の発話量を増やすことができ、更に、少人数でアクティビティーを行うことで、常に活動に参加した状態が保たれる。

活動は生徒主体で進行するため、サポート役としての教師、及びALTの役割は大事である。

表3 "Guessing Game"を利用したグループ間交流活動

形態: 40 人学級・10 グループ (各4人) 5グループ毎にA班, B班に分ける。

1. 各グループでトピックを選択し、ゲームの clue を作成する。
2. 各自がデモンストレーションするグループを割り当てる。

A班 [] [] [] [] [] B班 [] [] [] [] []

発表するグループは、入れ替えて両方の班でデモンストレーションをするので、各自の割り当ては、2グループづつになる。

3. グループ交流スタート (時間: 1人1回30秒)
割り当てられたグループに行き、clue を読み上げ、自分たちのトピックを Guess させる。その際、相手からの質問を受けることができる。
時間内に正解したグループは、申告し、ポイントをもらう。

4. すべてのグループが終了したら、各自に self-evaluation を書かせる。

イ インタクションを促進する表現

スムーズな進行を促す表現を定着させることにより、対話の継続や深まりが期待できる。例えば、Pardon? (もう一度言って) / What do you mean? (どういう意味?) / Why? (どうして?)などは、相手に次の発話を促し、I think... (～と思う) / Well ... (えーつと) / Because ... (なぜなら～)などは、自らの発話を促す表現である。

上記表現は、ただ単にインタクションを促進するだけでなく、実践的コミュニケーション能力を伸ばす指導には欠かせない「理由付け」としても重要な表現である。

3 評価の工夫

(1) 実践的コミュニケーション能力の評価

実践的コミュニケーション能力を高める指導を目標にしている場合は、評価も実践的コミュニケーション能力に焦点をあてなければならない。言語知識面だけでなく、メッセージの伝達の方に評価の重点を置くべきである。

そこで注目されるのが、実践形式のインタビューテストである。言語知識と伝達能力の両面に関して、細かな項目(チェックポイント)を定め、それぞれに対して評価基準(Excellent, Good, Average, Poor等)を設定し、それぞれの能力を測定することにより、多角的に評価を行うことができる。その際のチェックポイントとしては、Comprehension(理解力)、Speed(応答・話す速さ)、Pronunciation(発音)、Fluency(流暢さ)、Grammar(文法上の正確さ)が揚げられる。

さらに、コミュニケーション面に留意するならば、Open-ended Question(生徒が自ら考えて答える必

要のある自由度の高い質問)を設け、生徒の柔軟な対応・応答を評価の中心にすべきであると考えられる。

表4 Open-ended Question を用いたインタビュー・テスト例



(2) 内発的動機を高める自己評価(Self-evaluation)

自己評価について市川伸一は『『まだ、何が分かっていなくて、ここで何を学んだのか』、あるいは、『まだ、なにがわかっていない(あるいは、できない)ので、これから何をすべきなのか』というメッセージを自分自身に発することこそ自己評価だと思う。』とし、自己学習において自己評価が次の学習へ向けての意欲や目標や方法に結びつくと言っている。つまり、自己評価は次の学習への内発的動機と成り得るのである。

その上でも、自己評価は毎時間の課題終了後に設定するのが、効果的であると考えられる。英語の質問形式で行う場合は、生徒が答えやすいように質問に工夫を凝らすべきである。

(3) 評価のバックウォッシュ効果

バックウォッシュ効果とは、評価の在り方が、生徒の日常の学習態度に及ぼす影響のことを言う。実践的コミュニケーション能力を重視した評価を取るならば、生徒は学習においても実践的コミュニケーションを意識するようになる。

評価におけるバックウォッシュ効果を念頭に置き、授業計画を実践的コミュニケーション能力の育成に焦点をあてるのが重要である。

III 指導の実際

1 検証授業

(1) CLASS : Okinawa Technical Senior High School 2-1 (Electronic Engineering Major)

(2) MATERIAL : Lesson 5 Giving Directions, ENGLISH STREET

(3) ALLOTMENT : 3 periods

(4) OBJECTIVES OF THIS LESSON :

- To develop students' abilities to understand a speaker's intentions, and to foster a positive attitude toward communicating in English.
- To have them become familiar with the expressions of giving directions.
- To have them participate in the activities of explanation and expressing opinions.
- To establish their English expression through task-solving activities.

(5) TEACHING OUTLINE :

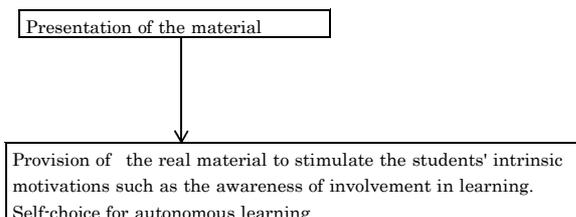
<1st period> 1) Introduction of the lesson

a. Oral Introduction

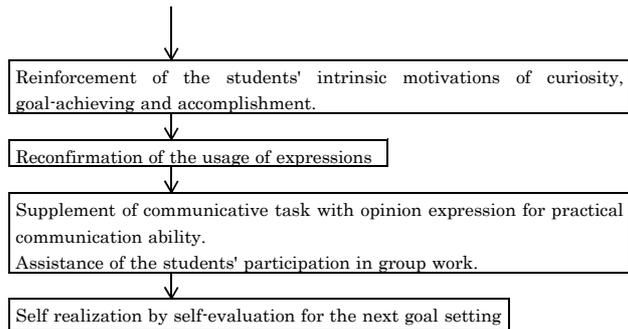
b. Key expressions

2) Creative task

a. Pair work -- Exercise on asking and giving directions with real map of Naha.



- <2nd period> 1) Review of the previous lesson
 a. Oral practice
 2) Creative task
 a. Outdoor exercise -- Navigation game in the school yard with solving questions.
- <3rd period> 1) Warm-up
 a. Review quiz
 2) Creative task -- Group Work
 a. Reasoning gap activity
 3) Consolidation
 a. Self-evaluation



(6) TEACHING PROCEDURE :

Time	Procedure and Remark	Teacher's Activity	Students' Activity
5 min.	[3rd period] Calling the role Greeting	<JTE> Take the students attendance. Greet the students (class or individual) and each other.	<ALT> Put up the poster and cards on board. Greet the teachers.
10 min.	1) Warm-up a) Review quiz *This is to reconfirm the usage of key expressions. *Create a relaxed atmosphere where the students feel free to speak out.	Have the students repeat after the ALT and practice the pronunciation on each phrase. Instruct them on the review quiz. (Have some volunteer put the cards in the correct position to complete the conversation.) Start the quiz and check the answers, and then give points to the correct answers. After having them practice the dialogue, ask for volunteers to demonstrate the conversation, (changed or unchanged) giving them points.	Repeat after the ALT. Participate in the quiz. Get points. Perform the activity.
30 min.	2) Creative Task a) Reasoning Gap *By expressing their own opinions in English to make the activity communicative, they will also become aware of self-involvement in it, which is one of the elements of intrinsic motivation. *Providing a chance for them to participate in a communication community will develop their communication ability.	Tell the students to separate into 8 groups. Instruct them on the creative task. a. Give the situation to each group. b. Tell them to fill in the blanks by choosing some items and giving reasons. c. Have them practice the dialogue. d. Tell them to demonstrate their dialogue to the partner group to follow the route on the map. e. The partner group must comment on the plan. f. Have them do vice verse. (Groups then change roles) Assist them to achieve the task.	Separate and make groups. Work in groups on worksheet. Demonstrate the dialogue. (Draw the route on the map) Comment on the other group's plan.
5 min.	3) Consolidation a) Self-evaluation *To have the students realize the level of their English ability, this activity is useful and effective for other goal setting.	Tell the students to fill in the answers to the question on self-evaluation sheet. Close the class.	Fill out the self-evaluation sheet.

2 授業の考察

検証授業では、仮説をもとに、コミュニケーション的な実践的側面と内発的動機を高める側面を絡めながら、課題や学習形態を設定した。

(1) リーズニングの定着を図った課題

実践的コミュニケーション能力を促進するものとして基本的な理由付けの表現の導入を行い、授業やテストの中で、繰り返し使用した。当初、生徒達の反応は、理由付けの方法に戸惑っており、1つの文章を仕上げるのにもかなりの時間がかかった。これは、日常会話の中で理由を述べるということが、あまり成されていないからではないかと考える。

(2) 自己選択を与えた課題

生徒の自立性、自主性に訴えるために、ほとんど

の課題を選択形式にした。表現したい内容や自分の考えを自由に選ぶことができるため、生徒それぞれが仕上げた文章はバラエティーに富むものになった。しかし、すべての課題が予定時間を大幅に超過し、授業進行にかなり苦労した。自分が選択した表現を身につけるということで、自己責任が伴い、自律学習が確立され、内発的動機づけには非常に有効な手法であると考えた。

(3) グループ間交流

生徒の内発的動機を高め、個々の発話量を増やす目的として取り入れたのが、グループ間交流である。"Guessing Game"や"Reasoning Gap"では、グループのメンバーそれぞれが発表する役割分担があったため、一斉に大人数の発話を確保することができた。

ゲーム形式ということで、気楽に参加しており、解答もスムーズに得られていた。しかし、ゲームを実施する前の準備段階であるグループ作業に、かなり時間を費してしまった。又、相手の感想や意見を取り寄せる力はまだ不十分である。継続的、段階的に指導を行うことにより、効果が現れると考える。

(4) Open-ended Question

インタビューの中で用いた Open-ended Question は、生徒それぞれの能力に応じ、柔軟に話が展開するように心がけたため、生徒の反応も良かった。普段の授業では一対一でじっくり話すことができないが、インタビューでは個々の会話力を十分に観察できた。授業中では見られない意外な積極性や、理解力を発揮する生徒もいた。質問の Comprehension (理解力) は、7割以上の生徒が高得点を得ているが、実践的面の Fluency (流暢さ) は3割程度の者のみに留まっている。「会話を発展させる力」も、まだ十分だとは言えない。しかし、この形式のテストを定着させ、定期的に訓練することにより、実践的コミュニケーション能力は伸びると考える。

(5) 自己評価

アクティビティーの後に行う自己評価は、生徒自身が自己の能力を判断する上で、有効な手段であったと考える。授業に入る前の事前調査では、自己のコミュニケーション能力は非常に低い、又は低いと判断していたのが 56 % と大多数をしめ、非常に高い、又は高いと判断したのがわずか 6 % であった。しかし、各課題終了後に行った自己評価ではしだいに好転し、最終課題後には、自己のコミュニケーション能力を低いと判断したのは 10 % にまで減少し、非常に高い、又は高いと評価したのは 46 % にまで昇った。

このような生徒の意識の変化がみられたのは、内容設定を生徒自身に委ねたことにより、興味・関心が高められ、課題達成への意欲につながったからだと考える。そのため、成就感も得られ、自らの活動に満足したからだと考える。課題内容の難易度に関しては、いずれも難しいと答えていた。それぞれ異なった内容に取り組むため、他に頼れないという状況になり、自己責任が求められたからだと考える。

<主な参考文献>

大下 邦幸編著	『コミュニケーション能力を高める英語授業 理論と実践』	東京書籍	1996
Dickinson, L.	"Autonomy and motivation: A literature review." <i>System</i> , 23/2, 165-174.		1995
市川 伸一著	『開かれた学びへの出発 21 世紀の学校の役割』	金子書房	1998

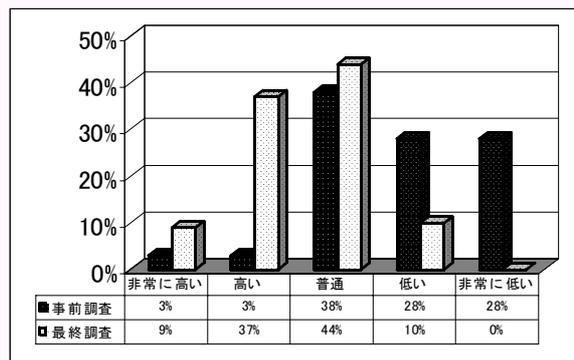


図1 コミュニケーション能力の自己評価

3 仮説の検証

自己評価の結果からも分かるように、コミュニケーション能力な授業内容は内発的動機を高める課題と相互に作用し、生徒の意欲・関心を高め、生徒自身に自己のコミュニケーション能力が、多少なりとも伸びていると実感させるものであったと考える。「実践的コミュニケーション能力」は、短期間で確立できるものではない。よって、長期的に計画を立案し、指導を継続的に実践することにより、最終目標として「実践的コミュニケーション能力」の育成が達成できるものと思われる。

検証授業では、短期間で仮説の検証を進めていかなければならないため、1時間の課題量も多くなり、ついていくのに困難な生徒もいた。時間配分等、展開方法は今後更に検討が必要である。しかしながら、この形式を継続して実施していくことにより、実践的コミュニケーション能力を伸ばすことができるという手がかりを得ることができた。

IV まとめと今後の課題

実践的コミュニケーション能力を伸ばすための指導の工夫として、コミュニケーション能力、かつ内発的動機を高める授業、及び評価の研究を行ってきた。これまでパターン化された表現の指導に重きを置いていたのを脱することができ、生徒個々も異なった表現を使用したり、ある程度、考えを自由に表現できるようになったことが、何よりの成果である。今後は、有効的な指導計画の立て方や、指導技術の向上の研究も持続していきたい。